

旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）を飾った美術染織に関する一考察

一室内装飾としての観点から一

菅崎 千秋（家具道具室内史学会 事務局）

現在、迎賓館として使用されている建物は、当初、時の皇太子明宮嘉仁(のちの大正天皇、以下東宮と略称)のための東宮御所として、1909(明治42)年建設された。宮内省内匠寮技監片山東熊設計による本建物は、外国人をもてなす迎賓施設として利用することも想定されていた。西洋建築の様式と技術の粋を極めた明治洋風建築の集大成として、2009(平成21)年には近代建築で初めて国宝に指定されている。

本建物の建築的側面に関しては多くの先行研究がなされているものの、その中の一室を装飾するために、画家に下絵を描かせた美術染織が制作されたことはあまり知られていない。東宮謁見室である狩の間(東二の間)に浅井忠下絵《武士の山狩》綴織、東宮妃謁見室である孔雀の間(西二の間)に今尾景年下絵《孔雀花卉の図》刺繍が飾られていた。本発表の目的は、この二つの織物に関して、建物の室内を装飾するという機能に注目し、主題やモチーフなどのさまざまな側面から考察していくことにある。

まず浅井忠下絵《武士の山狩》綴織について、制作経緯や浅井忠の画業、同主題他作品との比較から考察し、本作の特殊性を明らかにする。浅井忠の弟子による文章、および本作のスケッチや試作から、浅井が東宮御所御造営局と相談を重ねながら制作を進めていった大まかな経緯がうかがえる。《武士の山狩》は、日本において権力誇示に用いられた鷹狩を描いているが、史実は設定されておらず、騎乗する名もない3人の武士を表現している。大画面性や騎馬像形式に、歴史画的な要素を感じさせるものの、日本人には鷹狩図として、外国人には騎馬像として、その両方の主題と捉えうる風俗画となっていることがわかった。

次に今尾景年下絵《孔雀花卉の図》刺繍に関して、その制作経緯は不明な点が多いが、前近代、近代における孔雀を絵画化した作品には見られない構図で孔雀を描いていることが確認できた。画面に大きく描かれた桜の木、その上に乗った雄の孔雀は雌の孔雀を見下ろし、互いに見つめ合っている。桜や孔雀は、万博などを通して外国人にも馴染みのある「日本風」の花鳥であり、仲むつまじそうに表されたその姿は、若き東宮夫妻と重なる。さらに雌の孔雀の傍には、それまで孔雀とともに描かれることのなかった、「男子誕生」を表す吉祥花・萱草が描かれている。これらのことから、この作品には、東宮を支え、敬い、その後継者を産むという東宮妃の役割が花鳥の姿を借りて表されていると考えた。

以上の分析から、これらの作品には、東宮の住まいと外国人の迎賓施設という建物の二つ用途に合わせた表現が認められる。つまり、これらは特定の個人によって独創的に制作されたものではなく、西洋文化と比しつつ、建物に相応しく、自国の過去の前例を踏襲したりしながら、それらを慎重に組み合わせることによって、そこに新たに特別な意味を持たせるというようなものであった。